

カルチュラル・スタディーズ：幼児向け テレビ番組におけるポストモダンティーン

地球規模化時代における「セサミストリート」を中心に

田 辺 和 子

1.0 序

本論文は、日常的に視聴されている子供向けテレビ番組を、カルチュラル・スタディーズの視点から、その教育的・文化的意義を評価しようとしたものである。カルチュラル・スタディーズとは、問題を文化的実践という観点から捉え、それを「力 (power)」との関連において分析しようとする研究である (du Gay, Hall et al. 1997, p.18)。カルチュラル・スタディーズでは、従来学問的対象としては取り上げられにくかったスポーツ報道や婦人雑誌、娯楽映画やビデオなどの大衆文化に積極的に取り組み、その背景となる政治・経済・社会習慣的要素を明確にしてきた。それらの研究の中で、子供向け文化表象物としてはディズニー映画が頻繁に批判の対象とされてきたが、テレビ番組分析は、いわゆる「昼メロ (ソープドラマ)」といわれる昼時に家庭の主婦向けに放映されるドラマや、クイズ番組にその関心が主に向けられてきた。本論文では、従来取り上げられることがあまりなかった子供向けテレビ番組に焦点を当てた。その理由としては、批判力のない子供が意識を持ち始めてすぐに接する文化表象物の中に、その社会の価値がどのように刷り込まれているかを検証するためである。また、それが教育の本来の目的である人間性の育成に貢献しているか考察することが必要であると考えたからである。

2.0 「セサミストリート」めぐる問題

アメリカの幼児向けテレビ番組「セサミストリート」は、1967年にCTW (Children's Television Workshop) によって制作された。主にフォード、カーネギー両財団からの資金援助を受けて、ハーバード大学心理学者 Gerald Lesser の調査結果を元に開発されて以来、世界 141 개국等で放映されてきた。また、そのうち 19 개국 (日本、イスラエル、メキシコ、ドイツ、中国) では、それぞれ当事国のプロダクションや放送局との共同企画番組という形式で視聴されてきた。(Street Smart 1998: Kraidy, 2002, p.9 / p.12)。テレビ番組の地球規模化 (globalization) は、子供向けアニメーション番組だけでなく、「教育番組」にも及んでいることがわかる。

2004年3月、日本ではNHKとの契約更新はされず、秋から「セサミストリート」は、テレビ東京で新たに日本語版を作成し放映されることが発表となった。新聞報道によると数年前から日

本語での放送に切り替えてほしいというセサミワークショップ側の意向に対して、あくまでNHK側は、「語学番組」としての位置づけを主張したということである（読売新聞,2004.3.1）。ワークショップ側としては、作成者の意図を最大限伝えるように利用してほしいということであろう。一方、NHK側は、「教育番組」は、すでに数多くの日本語の番組を放映しているので、より良いコンテンツを必要としている「語学番組」の枠組みで使用したかったようである。これは、「作る側」と「使う側」の思惑の食い違いから来るものであるが、ワークショップ側が考えるように「セサミストリート」は、日本においても果たして教育的文化的意義があるのか検討する必要がある。今回のNHKの態度は、地球規模化に対抗する地域化（localization）の動きともいえる。結果的には、民放によって日本でも「教育番組」として放映されることになるのだが、一連の出来事は、現代における「教育番組」のあり方を考える良い機会となった。

3.0 「セサミストリート」におけるモダニティー

モダニズムの一般的な特徴は、作品にこめられた「メタナラティブ」にある。すなわち、その文化表象物の背景に、作成者が信じる普遍的価値体系、たとえばマルクス主義、リベラリズム、キリスト教などを有していることである（Storey, 2001,p.150）。Jean-François Lyotardは、「メタナラティブというのは、包含、排他と二つの作用を意味し、いわば精練作業のようなもので純正化を目的とする。そして、普遍的価値や最終目標の完遂という名目の元に他者の言説（discourse）を抑圧し、除去してしまうこともある」と述べている（同上）。すなわち、メタナラティブというのは、あるグループが共有する価値や美德であり、そのグループの連帯感を強固にする思想といえよう。

「セサミストリート」におけるメタナラティブというのは、制作が始められた1960年代後半から1970年代にかけてアメリカ社会で市民間の不平等が問題となった背景からもわかるように、アフリカ系黒人の子供に対してのアメリカ人としての教育であった。これは、資金提供がフォード、カーネギーというアメリカ資本主義社会を代表する二大財団であることから推察できるが、アメリカ社会の支配層が、1960年の市民権運動に社会崩壊の危機を感じ、貧困層の大半を占めるアフリカ系黒人の子供の「社会的同化」を促す具体的対策の必要性を認めていたためである（Fish & Truglio, 2001, p.4）。

「セサミストリート」のメタナラティブの具体的内容は、数字の認識と識字教育にある。番組のカリキュラムとして一日の放映分に対して数字ひとつ、アルファベットひとつが割り当てられ、教訓的な物語の実演とともに、番組の中ではアニメーションで演出された画面で繰り返し提示される。これは、小学校に入る時点で、すでに基本的な知識を得ている中産階級の白人の子供との差をできるだけ小さくしておこうという意向から来ている（Lesser, 1974, p.13）。つまり、小学校教育についていける基本的読み書き・計算能力の育成に主眼が置かれているのである。これは、Bloom（1964）、Coleman（1966）、Deutsch（1965）が証明しているように、貧困層の家庭に育った子供は、就学時以前からすでに学習技術において、発達が不十分であることを考慮してのことである（同上）。

カリキュラムには、物語が伝えるべき教訓的なテーマも配置され、それぞれの番組がそのテ

マに沿って制作されている。「協力」「独立」「自己決定」「コミュニケーション」などは、特によく物語のモチーフとして取り上げられている。

上に述べた具体例として、番組の中で演じられた教訓的な物語を二つ紹介する。最初は、ビッグバード（セサミストリートのなかに出てくる中心的キャラクター）の家作りの話である。日本で2002年8月24日に放映された話であるが、「協力」と「独立」をテーマとしている。自分の家を持ちたいビッグバードは、3匹の子豚が扮する建築士の訪問を受ける。その3人（匹）の建築士はそれぞれ斬新なアイデアの建物を売り込むのだが、結局ビッグバードは、おばあさんにアドバイスを電話で求め、その結果、木の枝を集めた非常に簡素な鳥の巣を、友達の手を借りて作るのである。

2004年1月31日に放映された番組では、初対面の人に向かって恥ずかしがらずに話すことが、テーマになっていた。鳥類以外の動物と話すことが苦手なビッグバードが、最終的にはセサミストリートの住人と上手にコミュニケーションを取ることができるようになったという話である。

このように、「セサミストリート」は、就学前の人種間の教育的不平等を是正する目的で、綿密に練り上げられたカリキュラムに沿って、制作されていたのである。そこには、国民の間の差別と偏見による摩擦を避け、アメリカ社会の安定を図ろうとする社会的使命が担わされていた。

4.0 「セサミストリート」におけるポストモダンティーン

「セサミストリート」は、ポストモダンの文化的特徴も多く見られる。本項では、「超現実 (Hyperreality)」「分節性 (Fragmentation)」「間テクスト性 (Intertextuality)」「多文化主義 (Multiculturalism)」の4点に絞って分析してみる。

4.1 超現実性

フランスの思想家Jean Baudrillardは、アメリカ文化をつぶさに考察することによって、「超現実性」を現代アメリカ文化の特徴と述べている。「超現実性」というのは、現実や独自のものとフィクションや模倣というものの区別が消滅することと定義した (Storey, 2001, p. 152)。彼は、ディズニーランドをしばしば例にとりあげ、ディズニーランドが提供しているものというのは、現実逃避の幻想の世界ではなく、アメリカにとってのある種の「現実」であるという見解を明らかにした。たとえば、子供たちは、ミッキーマウスMickey Mouseに会いに行くと発言する。この時、ミッキーマウスは、mickey mouseでもなくmickey miceでもなく、英語アルファベットの大きい文字で表されている。すなわち、架空のイメージによって作り出される人格化された‘存在’そのものである。これが一般に「キャラクター」と呼ばれる現代消費社会における「超現実」を象徴している。Baudrillardによれば、この「超現実」はわたしたちに事実を歪曲し、自分の都合のいいような情報に変換してしまうことを可能にするというのである。「事実」の喪失、確実性の崩壊というのは、Lyotardのポストモダニズムに関する中心思想であったが、Baudrillardは、この同じフランスの思想家Lyotardのポストモダニズム論を発展させたといつてよいだろう。

「セサミストリート」において「超現実」の特徴というと、ジム・ヘンソンによって考案された

「マペット」の採用である。この「マペット」というのは「パペット」と「マリオネット」の混合語で、一見、普通のかぶりもの人形が縫いぐるみのように見えるが、非常に複雑な動きが表現できる構造を持つ新しいタイプの人形であった。このマペットの効果は高く、あたかも本当にコミュニケーションできるような錯覚に視聴者を陥らせた。いわば、「擬似コミュニケーション」「擬似人間性 (pseudo-humanities)」の生産といつてよいだろう。

「セサミストリート」におけるマペットは、物理的な構造だけでなく「ビッグバード (Big Bird)」「エルモ (Elmo)」などそれぞれに十分考えられた性格付けがなされている。たとえば、ビッグバードは、お人好しであるけれど失敗も多く、エルモは三歳で、スペイン語アクセントの英語を話す。これらの設定は、視聴者である子供に、より身近に具体的な存在感を持たせることを可能にしている。小島 (1994) によると、CTWの番組制作スタッフは、子供の日常的な失敗や、吹き出してしまいそうな間違いを表現するのに、実際の子供を出演させるよりマペットのほうが適していると判断したそうである。確かに自分たちの思うがままに統御するには、カメラの前で黙り込んでしまうかもしれない人間の子供より、マペットのほうが扱いやすい。「セサミストリート」における超現実とは、計画され尽くした演出を通して、「現実」を創造しようとしたところにある。

4.2 分節性

ポストモダニティーにおける分節性とは、表現体の中に一貫した物語を作らず、個々の部分を空中に浮かすような様態を取ることである。つまり、部分をあえて相互に関連付けないのである。この「脱文脈化」の特徴は、具体的な表象物とそれによって表現される意図に強い関連性を求めないということに結ぶがる。Baudrillardは、われわれはすでにすべての表現とそこに意味を込める実践の時代の終焉にあるといっている (Hall, 1996, p.135)。一方、Jamesonは分節性の基本的考えというのは、統一よりも差異を重んじる論理に拠るものだとしている。差異を無視するのではなく、価値観の異なった立場の考えを受け入れようとする努力の現われと解釈している (Woods, 1999, p.36)。

Cornel Westは、特にアメリカのラップ音楽がアフリカ音楽のリズムやビートを取り入れていることから、「独自性」の創造というよりも過去と未来の混合作業の特徴を持つとしている (同上, p.174)。Ann Kaplanは、ロック音楽の分節性を、覇権的文化様式への対抗姿勢であるとして、その文化的エネルギーともいべきものを認めている。このようにアメリカ文化の分節性については、肯定的な立場からも否定的な立場からもさまざまな解釈が行われているが、すでに分節化の傾向が強くと認められることは確かである。分節化は、過去の作品の「使いまわし」を行いやすい形式である。映画でもジャズでも、過去の作品の再生はあたりまえのこととなり、スタイルというものに固執することは少なくなっている。

「セサミストリート」における分節性は、雑誌形式とも呼ばれる細切れの部分による構成にみられる。30年前の放映当初は、短いシーンでは1分以内、大部分が3分程度の切り替えによって約20の部分によって構成されていた。このコマーシャル形式は、子供が注意力を向けられる時間が短いことに配慮した画期的な方法として紹介された。そこで、いかに分節化されているか明らかにするために、セサミストリートの番組全体の構成を表してみた。主な舞台の構成要素は、

アフリカ系アメリカンのコミュニティを想定した下町の一角を表現したスタジオ，アニメーションや，実像とアニメを合成したようなユーモラスなフィルムであるピクチャリゼーション，屋外でのフィルム撮影，スタジオでの子供へのインタビューなどである．同一番組の中で，これらが次々と数回にわたって画面に現れ，それぞれの話を展開させていく．具体的構成例を下に示す．

【NHK 2003年5月13日放映】

午前7時36分 テーマソングによるオープニング

38 歌とアニメーションフィルム

40 ハリウッド女優Whoopi Goldbergとマペットのスタジオのセットでの会話

42 アルファベット‘U’の紹介アニメーション(1)*

45 物語「ビッグバードの巣」(1)スタジオでのマペットと人との会話

49 数字19の紹介フィルム(1)

50 物語「ビッグバードの巣」(2)

55 マペットと歌手による歌

58 アルファベット‘U’の紹介アニメーション(2)

8時00分 物語「ビッグバードの巣」(3)

02 数字19の紹介フィルム(2)

03 体操する子供たちの屋外フィルム

05 物語「ビッグバードの巣」(4)

09 アルファベット‘U’の紹介アニメーション(3)

11 物語「ビッグバードの巣」(5)

12 エルモの世界(前部分とは別立ての独立性の高い構成部分)

- 15 終了

* ()中の数字は，同じ場面の登場回数を表す．「数字」などの紹介はまったく同一フィルムの繰り返しの場合もあるが，物語では，場面が進むごとに話が展開していく．

分節化は，ポストモダニティーの特徴によって遂行されたと同時に，子供の注意を引きつける効果は高かったため，他のテレビ局との過激な視聴率競争という背景から積極的に取り入れられた．なぜなら，資金援助を受け，営利が第一目的ではないといっても，視聴率が悪くせつかくの資金投資が無駄に終わることは許されなかったからだ．番組の成果を上げるためにも他局の娯楽性の高い番組に対抗して視聴率は上げなければならなかった．つまり，「セサミストリート」の最大の目標は，子供が他局にチャンネルを回さないようにすることだったのである．この点において，それ以前に類似したもののない斬新な形式として「雑誌形式」は，大成功をおさめた．

4.3 間テキスト性

間テキスト性とは，テキスト間のやりとり，すなわち他のテキストの引用や参照を意味する．

このような状況をポストモダニズムの特徴は、パロディの文化であるとまで評されている (Storey, 2001, p.158). 実際、アメリカのテレビ番組では、過去に人気のあった番組の形式が何度となく再現されている (Feuer, 1992, p.156; Maidment & Mitchell, 2000, p.146).

「個人主義」というイデオロギーは、モダニティーの中核をなすもので「独創性」「創造性」というのはその代表的な概念である。これに対して、ポストモダンにおいて、純粋な著述・原作者というものが存在するのかという議論が行われてきた (Collins, 1989, p.44). これは、引用したテキストがどの程度新しいテキストの中で認知できるかという論議にとどまらず、「ジャンル」という概念の検証に展開していく。間テキスト性は、ジャンル間の境界線や機能をあいまいにした。英語で ‘advertorials (advertisement : 広告と editorial : 編集)’ , ‘infomercials (information : 情報と commercial : コマーシャル)’ , ‘edutainment (education : 教育と entertainment : 娯楽)’ , ‘docudrama (documentary : ドキュメンタリーと drama : ドラマ)’ ‘faction (fact : 事実と fiction フィクション)’ という混成語が出現したことから、間テキスト性の特徴が理解できる。これはテレビ番組だけでなく、レコードやビデオなどすべての文化表象物において見られる特徴となった。

「セサミストリート」における間テキスト性については、まず番組のタイトルにおいてアラビアンナイト物語「アリババと40人の盗賊」の呪文のことばである「開け！ゴマ (Open Sesame!)」がまずあげられる。「セサミ」とは、なにか始めるときの合図という発想で用いられているが、レッサー教授は、タイトルを決めるにあたっては、なかなか決まらず反対者がいないタイトルというきわめて消極的な選び方をしたと回顧している (Lesser, 1974, p.168). その他の選択肢として挙げられていたのは、‘Two-and-Two Are Five Show (2たす2は5のショー)’ ‘Little Kiddy Show (ちっちゃな子供のショー)’ ‘Nitty-Gritty, Little Kiddy Show (かっこよくて、ちっちゃなこどもショー)’ であるが、これらはいずれも過去のテキストや概念に依存するものではなかった。

現代における「セサミストリート」は、引用する側から引用される側となって、後期資本主義時代の特徴とされる文化表象物区分の境界線があいまいとなるメディア間における間テキスト性を現わすようになった。日本では一度放映が途絶えた後、1988年に再開された時には「メディア・ミックス」という総合的販売商法が展開されていた。現代ではごく当たり前の商法であるが、テレビ番組のキャラクターが印刷物やビデオ、CD、他のメディアにおいても商品となって売り出されるのである。「セサミストリート」においては、ソニーの関連会社によって開発されたキャラクター・グッズも大きな収益を上げた。また、「東京セサミプレイス」というテーマパークも作られ、現代では「ベルリッツ」の英語教室が「セサミストリート」のキャラクターの設定により、それぞれのコースの区別を情報化している。

4.4 多文化主義

セサミストリートの歴史を調べると、1980年代後期から1990年代にかけてのカリキュラムが多文化主義の主張を明確に打ち出してきている。番組の制作が提案されたきっかけも1960年代の市民権運動に端を発したものにだけに、政治的平等だけでなく多様な文化の共存が認められる社会構築の要求には、迅速に対応したようだ。その証拠として1990 - 1994年第22 - 25期のカリキ

ュラムには、複数の民族間（アフリカ系アメリカ人、アメリカ原住民、ラテン系アメリカ人、アジア系アメリカ人、ヨーロッパ系アメリカ人）の関係を教育項目として取り上げるよう示されている（Fish & Truglio, 2001, p.31）。

異文化理解促進のための具体的カリキュラムの例としては、「プレイデート（Play Date）」が挙げられる。「セサミストリート」の番組の中の数分間のプログラムであるが、白人の男の子が実際にアフリカ系アメリカ人の友人の家を訪れるものである。そこで、ビデオゲームを見て自分の家と共通しているところを発見する。その一方で、今まで食べたこともなかった野菜を食べる機会があり「差異」を認識するのである。

多文化主義は、キャスト選抜にも表れている。大人のキャスト8人のうちいわゆる白人は、Gina と Bob 2人で他6人はラテン系、アフリカ系、アジア系から構成されている。子供の出演者についても、視聴者の状況に即したさまざまな背景を持つ子供たちを集めている。

5.0 「セサミストリート」の評価

5.1 肯定的評価

アメリカで放送が開始された当初は、番組の斬新さと社会的不平等の問題に真正面から取り組む制作側側の姿勢を高く評価する反応が多く見られた（Saturday Review, 1969）。また、実際に多くの賞も獲得し、その理由の共通した点というのは、就学前の子供に知的・文化的刺激を与えることの重要性を広く社会に訴え、実際に子供たちが就学後の学校での成果を上げるのに貢献したことであった。

「セサミストリート」が何らかの効果を上げることができたとしたら、それは膨大なエネルギーと予算がつき込まれたことに大きな理由がある。Lesser教授は、番組作成に当たり、それまでに放映された子供向け番組をくまなく見て、子供たちの反応を詳細に考察した。その結果、教授は、以下のように子供たちの反応をまとめたのである。

さまざまな音や珍しい形式の音楽には非常に興味を示す。

意味のないことばや響きが面白いことば、そしてそれらの延々とした繰り返しを特に好む。

親しみのあるキャラクターが日ごとと異なった状況で登場することには多少混乱する。

Lesser (1974, p.134)

この実地調査を重視した姿勢が、35年間の人気番組を支えてきた。テレビ史上、これほどまでに番組作成の前に調査や研究、子供を使った実験が行われたことはないだろうといわれている（Fish & Truglio (eds.) 2001, p.xvii）。制作者は、子供のための基礎調査に対して、テレビ番組の質の向上を目的とした構成のための調査（Formative research）を多く実施した。そして、セサミストリートの成功の秘訣は、番組の刷新のために常に行われているこの構成のための調査であるといっている（同上）。このような番組制作体制を責任者であるCooney女史は、プロダクションと調査部門との間の「結婚」と評した。それ以前には、制作現場のスタッフと研究や調査を担当する専門家が、相互に意見を交換しながら番組を制作していくことなどなかったのである。

5.2 否定的評価

教育的・文化的に画期的な試みと賛美を浴びた一方で、「セサミストリート」は、子供の注意を引き付け維持することを重視するあまり、娯楽的な要素を過剰に採用したと厳しい批判も受けた。論争の所在には二つある。まず、第一にテレビという媒体事態が、真の意味で「教育」が可能かという問題である。二番目の論点は、「セサミストリート」の斬新さは、教育的であるかという点である。

まず、第一の点について、1970年Janette Veatchアリゾナ州立大学教授（初等教育専攻）が、述べているには、テレビは、知識の伝達はできても、内面的成長は、指導者との相互のやりとりにおいて導かれるものであるとして、「セサミストリート」は、コマーシャルテレビの産物でしかないと感想を述べている。

次に、第二の点においては、Jane Healyが、子供の思考力の養成に貢献しうるかという観点から「セサミストリート」の構成を批判している。彼女の著書「滅びゆく思考力（Endangered Minds）」の中で、セサミストリートは、こどもの思考力を伸ばすことはできないとしている。なぜなら、思考力というのは、ものを読み取る中から育まれる能力で、「読む」という行為は多くの忍耐と自己感情の抑制力を必要とする。そして、これが自らが自分自身の能力の中で培っていく喜びなのだとしている。しかし、このような内面の力を鍛錬する場を「セサミストリート」は提供していないというのである。

Healyによる具体的批判の一例は、アルファベットの文字を一文字ずつ提示する形式である。彼女の意見によれば、読み取りというのは、あるまとまった文脈の中から情報をつかみとることであり、「セサミストリート」のように一文字一文字の認識やそれを自動的に発音することを訓練しても読み取る力、ひいては考える力にはおよそ結びつかないというのである。Healyは、「セサミストリート」の試みた‘斬新なスタイル’の望ましくない効果に警鐘を鳴らした。子供たちは、文字をはずませたり、姿を七変化させたりして、おもしろがらせられることに慣れてしまっているので、小学校に行き、踊りも歌いもしない、ただ静かに本の中に納まっている文字の連続を見て、TVほど楽しくもおもしろくもないものだとして認識するとやる気をなくしてしまうのではないかということだった。しかし、このような批判を受けたためか、1980年代に入ると番組は改編され、場面の切り替えの数が減り、それぞれの部分に費やされる時間が長くなった。また、従来のマスメディアでは、取り上げられにくかった障害者や死の問題も扱われるようになったとHealy自身が考察している。

アメリカの批評家 Neil Postmanも、セサミストリートの‘斬新なスタイル’について厳しい言葉を向けている。Postman（1985）によればアメリカ文化は、人々を甘やかし、創造性や生きる力を奪い取ってしまうと警告している。彼の著書「Amusing Ourselves to Death（楽しみ果てて死の濱で）」で、「物を教えること」が「飽きさせずに面白がらせること」と区別がつかなくなってきていると指摘している。Postmanは、子供たちが「セサミストリート」を好む理由は、テレビにおいてはコマーシャルが細心の注意が払われ作られている娯楽であること、そしてセサミストリートがそれに似ているからであるとしている。また、親の立場からすると、子供たちをテレビの前に放置しても罪悪感を持たなくてもよいし、また、就学前の子供にいちいち読み書きを

自分で教えないでも済むという気持ちからだとしている。Postmanの指摘しているように「セサミストリート」で具現化された価値は、現在のアメリカという国全体を支配している嗜好ともいえよう。つまり、真の教育的意義を検討しないで、飽きさせないこと、楽しませることに主眼が置かれているというのである。

Postmanは、テレビというメディアと比較し、学校という機関の重要性を主張している。学校では、子供たちは先生や友人との交流の中で学んでいく。教室内の活動を通して、人は真に学ぶのだと述べている。そして、デューイの言葉を引用しながら、人が学習する上で一番重要なことは、何を学ぶかというのではなく、どのように学ぶのかというその方法について何かを獲得するのであるとしている。この点から考えると「セサミストリート」は、「教育番組」と定められてはいるものの、ステージの上の娯楽ショーと同じである。だから、子供たちにテレビを好きにさせることには貢献するだろうが、学校について興味をそそらせる効果を持つものではないと解説している。

Postmanのテレビというメディアによる教育への懐疑的態度は、テレビによる公共のための教育放送の可能性を否定し、時代錯誤的であると批判されてもいる。Kellerは、文化的・社会的なテレビ役割に期待して、自由で偏見の少ない社会の構築に貢献することができるという意見の持ち主である。Keller（1995）によれば「セサミストリート」は、テレビの新たな社会的機能を示し、さらにテレビをより効率よく利用しようという動機付けに好ましい材料であるとしている。

PostmanとKellerの見解の相違は、テクノロジーと教育の関係を考えるよい機会ではないかと思う。教室での教師と子供の相互交流は、はたして教育の普遍なのか、また、時代の変化をどのように教育の改善として受け入れるべきなのか、教育に携わる人間がひとりひとり考えながら、教育を行わなければいけないことは確かであろう。それぞれの社会が異なれば教育も異なるように、時代の変化に応じて、教育のあり方も変えていこうとする態度は非常に重要であるが、すぐに実行できるものでもない。しかし、時代の変化をテクノロジーがもたらす社会の進化として疑うことなく受け入れ、それを取り入れることがすなわち「進歩」や「改善」であると盲目的に信じることも危険である。テクノロジーの進歩は、人間を最大限に怠惰でわがままな存在にし、精神的・思想的破綻へと導いているのかもしれない。この問題解決については、「教育」を細分化し、教育の対象、目的によって異なった方針に基づいてその形式を選択していくことが必要である。幼児教育においては、人間関係を重視した考えを大切にすべきである。しかし、その一方で、教育による平等は、個々人が安定した生活を確保でき、社会の安定をもたらす大きな要素であることから、新しい可能性には意欲的に取り組むことが本当の意味で社会の「進歩」につながるのではないだろうか。

6.0 「ライオンとイングリッシュ」にみる「セサミストリート」の反省

放映当初は、多くの論争を巻き起こした「セサミストリート」であるが、およそ20余年たった2000年に、「セサミストリート」の対象より少し年齢の上の子供を意識した教育番組が発表された。「*Between the Lions*（ライオンとイングリッシュ）」である。これは、PBS（Public Broad-

casting Service)制作によるもので、直接的に「セサミストリート」の制作スタッフが関わったわけではないが、番組の編成において30年にわたって世界的に幼児番組の王座を守ってきた「セサミストリート」の正負それぞれの成果を考慮しないはずはない。そこで、「ライオンとイングリッシュ」を考察することで、「セサミストリート」における反省と修正を検証したいと思う。

「ライオンとイングリッシュ」は、基本的には、「セサミストリート」と同様にマペットショーの形式である。ライオンの家族が、図書館のスタジオセットの中でコンピュータを使いながら、さまざまな物語を紹介していく形式である。教育内容においてこの番組の大きな特徴は、言語科学的な検証を基本にプログラムの支柱が組み立てられているところである。綴りや発音の練習が、音声学・音韻学の研究を踏まえており、学問的に信頼性が高く、子供だましの提示の仕方はしていない。意識せずに幼いうちから言語学の正しい知識を持って言語を見つめる目を養おうとしている。

例：2004年3月6日NHK放映 カリキュラム

エピソード Tweet! Tweet!

カリキュラム Walter and Clay Pigeon meet face to with Tyrannosaurus rex!

キーワード：tweet

ワードファミリー：-eet (-eeze, -ee,-eep)

対象母音： ee (long e)

子音： d,b,squ-,sw-

高頻度語彙：go, little, see, sleep, to

新出語彙：descendent, flee, extinct, ancestor, meteorite,parakeet, eel, names of dinosaurs (pbskids.org/lions/pride [internet])

この番組は「セサミストリート」の欠点を修正したと解釈できる。その改善点というのは音声学的な点の配慮以外に、カリキュラムの内容として「セサミストリート」との際立った大きな違いは、民族間の調和や社会的弱者をテーマに取り上げるといった社会倫理的なメッセージが少なく、子供向け童話の語りを中心であることである。形式も「セサミストリート」における多くの部分から構成される雑誌形式に匹敵するような斬新なものはない。つまり、モダニティーとポストモダニティーの両方の視点からその特徴が薄れたものとなっている。

マペットやセッティングは、子供の目を引くのに十分な新しさはあるが、番組の構成は、やや地味な出来上がりという印象がある。しかし、現代という時代が反映されているのは、メディア・ミックスがインターネットを含んでいるところである。*Between the Lions*のホームページは、好ましい2001年子供向けウェブサイト選ばれた。

7.0 「セサミストリート」「Teletubbies(テレタビーズ)」「おかあさんといっしょ」との比較

本項では、「セサミストリート」とイギリス「テレタビーズ」日本の「おかあさんといっしょ」を比較することによってそれぞれの番組の特徴を明確にし、幼児向け番組の課題を整理したい。

これら三つの番組は、それぞれの国で長期にわたって放映されている幼児向け人気番組である。

7.1 「テレタビーズ」の場合

イギリスの「テレタビーズ」は、1997年に国営放送BBCが民間のプロダクションRagdollと共同制作した幼児番組である。現在も、世界120カ国以上の国で視聴されている（Teletubbies-jo.com, [internet]）。この番組の中心となる世界は、小さな緑の丘を舞台に4人のぬいぐるみが繰り広げる子供の世界の日常である。この番組が制作された当時は、イギリスの公共事業の私営化が促進され、子供向けテレビ番組も経済的効率性のためにアメリカのアニメーション番組が増える一方であった。このような子供をめぐる文化的環境の中で、BBCは、教育的水準を高く保ちながら同時に、商業的にも世界市場において十分な競争力を持った番組を制作することを迫られていた。「テレタビーズ」は、発表当時番組の内容・構成に関してその教育的効果に疑問を投げかけられ、時には辛辣な批判をも受けたが、興行的には成功しビデオ・コンピューターゲーム・雑誌・おもちゃ・その他関連商品の売り上げは、莫大な利益を収めた。

テレタビーズは、4人のキャラクターTinky Winky, Dipsy（黒人を連想させる面立ち）、Laa-Laa, Po（アジア系を思わせる面立ち）で構成されている。これらのキャラクターは、テレビに象徴されるテクノロジーとぬいぐるみの柔らかな感触を合わせ持った存在として演出されている。これは、子供をしっかり支えると同時にやさしく癒す意味をこめて設定された。テレタビーズが住むThe Tubbylandは、安全で平和な国でテレタビーズは、お互い思いやって仲良く暮らしている。この番組の対象は、1歳から2歳ぐらいからの幼児である。その理由は、イギリスでは、小さい子供向け番組があまりなく、年上の子供と一緒にその年上の子供向けの番組をいっしょに見ている現状が調査の結果が明らかになったからである。

原作者のAnne Woodは、人間の発達を考える上で、歩いたり話し始める幼児初期の段階を重視している。Woodは、この時期を「マジックタイム」と呼び、この時期に適切な刺激を与えることが子供の思考力を伸ばすためには重要であることを強調している（Teletubbies: Background, pbskids, [internet]）。そして、彼女は子供たちが平和で幸福な世界を心の中に思い描くことのように、その心の世界の創造のために、この作品を書いたのである。

「セサミストリート」と比較して、「テレタビーズ」の大きな特徴は、屋外で写したフィルムが番組のほとんどを占めていることである。ただし、フィルムには多少映像上の技巧が施され、太陽に赤ちゃんの姿を重ねたり、マイクのような形をした物体が「によきによき」と地面から姿を現わしたりする。しかし、基本的にThe Tubbylandの光景やTubbylandにある宇宙船のような彼らの住まいが中心で、めまぐるしく、まったく異なった類の場面が交錯することはない。番組のこのような特徴は、第一に、屋外での撮影を重視したこと、（最もこれは経済的に決して恵まれた状況ではなかったのでスタジオでの特殊撮影の予算がなかったためでもある）第二に、先に述べたWoodの意向で、この番組の目的は、あくまで子供に物語を楽しませ、想像力を育むことであり、機関銃のように出来合いの知識をつめ込むことではないことに起因している。

この番組におけるWoodの主張は、ジェンダーの扱いに置いてもっとも特徴的である。4人のテレタビーズは、ぬいぐるみの顔の部分の生地の色が薄茶、クリーム系（2人）、アイボリーと異なっているので、視聴者が民族的所属を連想できる容姿に仕上げられている。しかし、性別に

についてはまったく判断できない。スカートで遊ぶシーンは、全員がスカートで面白がって遊ぶし、4人のうち体の大きなぬいぐるみを「多分男の子だろう」と思っていると赤いハンドバックを持って踊ってみたりする。視聴者としては、自らの固定観念による性の区別が通用しないことに戸惑いながらも、そのジェンダーがない世界に新鮮さを感じられるのである。そして、今まで自分が小物や体の大きさ、色合いなどで勝手に性別を決めていたことを痛感するのである。Woodは、社会が作り出した通俗的な「セクシュアリティ」の特徴にこの作品を通して挑戦しているであろう。世界各地の「テレタビーズ」への反響は大きかった。西欧文明において紫の三角帽子は「同性愛」の象徴として理解されることもあるようで、このテレタビーズのキャラクターは、米国では大人の間で論争を引き起こしたそうである。(Robert Karenインタビュー, 2004.7)。韓国では強い批判と同時に、幼児だけでなく若い女性の間にも人気が高まり、日本では若い女性が、そのキャラクターグッズを買い集めるような現象も起こった。

ポストモダニティーという観点から考察すると、「テレタビーズ」は、メタナラティブを持っている点、分節化がほとんど見られない点で、モダニティーの要素が多く認識できる番組である。しかし、その一方で、テレタビーズという「技術」と「人間の心情」との結合の象徴ともいえる性別のない想像上の「存在(テレタビーズ)」の設定は、超現実の表象として「セサミストリート」のマベットよりもポストモダンとも解釈できる。

7.2 「おかあさんといっしょ」の場合

日本のNHK制作「おかあさんといっしょ」は、番組が開始したのは1960年代で、当初の幼児参加番組の大枠を維持しながら現在に至っている。番組の構成についていえば、主に一般の幼児が参加したスタジオ収録フィルムが主で、おもに子供たちが歌を歌ったり、ゲームをしたりする映像が中心である。そして、番組の途中に別撮りされた歌のフィルムが時折挿入される。この歌のフィルムは、映像テクノロジーが駆使され、ピクチャリゼーションで視聴者の目を楽しませている。かぶりものである人形が繰り広げる物語の部分もある。また、ごく最近では、非常に短い時間に昆虫の生態を移した映像などが紹介され、分節化が見られるようになった。

番組に登場するキャストは、「歌のおにいさん」「歌のおねえさん」であり、彼らが中心となって番組を進行させ、「体操のおにいさん」「体操のおねえさん」が番組途中の体操や舞踊の部分を担当している。この番組だけを見ていると男女ペア二組のキャスティングは、さほどの違和感を持つことがないかもしれないが、「テレタビーズ」におけるWoodの試み、また、「セサミストリート」における多文化主義に基づいたキャスティングの例を見ると、日本の形式には「男女」を一組とする形式が非常に固定化されているように考察されるのである。数十年間の放映の歴史を見ても、おそらく「歌のおにいさん」が単独で番組を進行したことや、男女複数の人間が、特に男女を同数に揃えることもなく、画面に同時に登場し互いに話し合いながら番組を進めていくことなどほとんどないのではないだろうか。

子供は、単純な繰り返しを好むという調査結果が「セサミストリート」の基礎調査で発表されたが、それは「おかあさんといっしょ」のような番組の形式の固定化ではないはずである。その証拠に、アルファベットや数字の繰り返しは、「セサミストリート」において何度も行われるが、キャストの役割や番組中のキャスト同士のコミュニケーションの固定化はほとんど見られず、で

きるだけ自然発生的な会話の形態をとっている。

「お母さんといっしょ」の視聴に伴う一番の危惧は、固定化した「男女一組」という概念がコミュニケーションにおける役割をも規定してしまうのではないのかということである。具体的に、「おにいさん」と「おねえさん」の発言を書き起こしてみた。

「おかあさんといっしょ」番組開始の会話

M：おにいさん F：おねえさん

2004年4月29日放映

1. M 「やあ、みんな。」
2. MF 「げんき ？？」
3. こどもたち声を上げる。
4. M 「げんき .げんき .」「みんなは、もう、『ぺたぺたぺったんこ』おぼえてくれたかな。」
5. F 「きょうも、げんきに歌ってね。動物をぺたぺたさわってみますよ。」

2004年6月17日放映

1. M 「みんなあ。」
2. MF 「げんき っ？」
3. M 「みんな、げんき、げんき。」
「ねえ、おねえさん。きょうは、みんなの知っているこのうたから！」
4. F 「いいわね。」
5. MF 「コアラ、うさぎ、パンダ。」

番組開始の挨拶のパターンは、ほぼ上記の形で固定されている。「おねえさん」が第一声を上げることはほとんどないといっている。また、第一画面では、毎回「おにいさん」と「おねえさん」が隣り合って座って挨拶するのが慣例のようで、いずれのうちの一人だけが単独でカメラに映り、画面を見ている子供たちに自由な形式で話しかけることはない。このように、ほぼ毎回固定したコミュニケーションの型を提示されること、ましては、男女の役割がそのコミュニケーション上で明確に定められていることは、教育的に好ましいとはいえない。漫才における「ぼけ」と「つつこみ」のような談話上の役割区分が、性別の上で無意識のうちに刷り込まれてしまわないだろうか。コミュニケーションには、いろいろなヴァリエーションがあり、そのヴァリエーションの幅の広さを示しながら、いろいろな形で対話が展開されることをむしろ主眼として幼児番組では伝えていく必要があると思うのである。また、出演形式についても、毎回「おにいさん」「おねえさん」が同時に出演している必要もなく、時にはどちらか一人が司会・進行役を単独で行う形式があってもいいのではないだろうか。個人として画面上で動くのは体操の「おねえさん」のダンスのパフォーマンスぐらいで、言語活動において「セサミストリート」のように出演者同士で何かを話し合ったり、司会者が一人でカメラの前で話すことは本論文の観察中では見られなかった。このように「おかあさんといっしょ」は、コミュニケーションの観点から考察すると単一的であり、ジェンダーによる役割分担の提示とも理解されるような危険性を含んだ形に整え

られている。

8.0 結論

本論文は、「セサミストリート」を中心に幼児向けテレビ番組のモダニティーとポストモダニティーを分析した。モダニティーにおいては、さまざまな少数民族の「社会的同化」を目的として番組が作られている点に特徴が見られた。その一方で、ポストモダニティーにおいては、すべてが教育的配慮から創出されたものではなく、Jamesonの指摘通り、後期資本主義の文化的表象物の特徴、すなわち、ジャンルなどの区切りが希薄になる傾向が明確に考察できた。そして、これらの分析は、「教育とは何か」という問いかけを提示したのである。テレビによる教育を技術時代に適合した新たな教育の形として認めるのか、ということである。少なくとも、現代においてテレビの教育番組は、人々の生活に入り込み、娯楽と区別がつかない状況になっている。すなわち、資本主義の発達教育のあり方に大きな影響を与えているのである。今回のSTWがNHKと契約を更新せず、テレビ東京と提携したことはその典型的な例といえよう。

現在、いろいろな国で「セサミストリート」をそれぞれの国に適合した形式に変更して使っているといっても、根底は同一の番組でその趣旨もはっきりしている。手を加える労力があるのなら、たとえわずかな予算でもその国独自の番組を開発すべきであろう。しかし、現実的には、番組の内容と経済的効率性を鑑みると、テレビ東京の決定は、限られた予算の中で、教育番組のコンテンツを得てNHKから少しでも多くの視聴率を奪い取らなくてはならない民間放送局としての選択となるのである。

地球規模化時代を迎えて、「セサミストリート」の教育番組の世界覇権とも言える状況を、このまま受け入れてしまっているのか、そして、それに値する教育的意義があるのか熟慮されなければならない。単一の番組に地球の多くの子供を晒すことは、むしろ文化的危機として捉え、地球規模化時代だからこそ地域的・個別的な文化教育の育成に十分な労力を注ぎ、人間性の高揚に真に寄与する番組作りが必要であろう。

参考文献

- Asahi.com[Internet] Available from: <http://www.asahi.com/culture/update/0309/001.html> [Accessed 25 March, 2004]
- Alexander, Alison(2001) *Taking Sides: Issues in Mass Media and Society*, McGraw-Hill/Companies
- Bauman, Zygmunt(1999) *Culture as Praxis*, Sage Publication, London.
- Baudrillard, J(1981) Simulcra and simulations' in Poster, M(ed. and trans.)(1990) *Jean Baudrillard: Selected Writings*, London, Blackwell.
- Bereiter, C. & Engelmann, S. I. (1966) *Teaching disadvantaged children in preschool*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Between the Lions*[Internet] About the show/ PBS Kids Available from: <http://pbskids.org/lions/about> [Accessed 10, March, 2004]
- Block, M(1998) Oh, Do you know the Muppet man? My Word's Worth, [Internet] 19 January, vol.3 #29. Available from: <http://www.qconline.com/myword/muppet.html> [Accessed at August 25th, 2002]
- Bloom, B.S(1964) *Stability and change in human characteristics*. New York: Wiley.

- Coleman, J.S., et al(1966) *Equality of Educational Opportunity*. Washington, D.C.:U.S. Government Printing Office, 1966.
- Collins, Jim(1989) *Uncommon cultures*, Routledge, New York and London.
- Connor, Stever(1997) *Postmodernist culture*, Blackwell, Oxford.
- Corner, John(1999) *Critical Ideas in Television Studies*, Oxford University Press, Oxford.
- Chandler, Danie(2003) [Internet] Semiotics for Beginners: Intertextuality Available from: <http://www.aber.ac.uk/media/Documents/S4B/sem09.html> [Accessed 22 February, 2004]
- Christine Geraghty & David Lusted(1998) *The Television Studies Book*, Arnold.
- Curran, James & Gurevitch, Michael(eds.)(2000) *Mass Media and Society*, Arnold, London.
- Deutsch, M(1965) Race and social class as separate factors related to social environment. *American Journal of Sociology*, 70, 474.
- Du Gay, P., Stuart Hall, Linda Janes, Hugh Mackay, Keith Negu(1997) *Doing Cultural Studeis*, Sage Publication, London.
- Fisch, Shalom M. & Truglio, Rosemarie T(eds.)(2001) *"G" is for growing*, Lawrence Erlbaum Associates Publishers, London.
- Fiske, John(1987) *Television Culture*, Methuen, London.
 (1989) *Understanding Popular Culture*, Routledge, London and New York.
 (1990) *Reading the Popular*, Routledge, London and New York.
- Foster, Ha(ed.)(1985) *Postmodern Culture*, Pluto Press, London.
- Frith, Simon(2000) 'Entertainment' in Curran, J. and Gurevitch(eds.) *Mass Media and Society*, Arnold, London.
- Hall, Stuart(1996) On postmodernism and articulation: an interview with Stuart Hall, Grossberg, L(ed) *Critical Dialogues in Cultural Studies*, Morley, D. and Chen K(eds.) Rougledge, London and New York.
 (1980) "Encoding/Decoding" in S. Hall, D. Hobson, A. Lowe, and P. Wills(eds.) *Culture, Media, Language*, Hutchinson, London, 128 139.
 (1984) The Narrative Construction of Reality, *Southern Review* 17:1, 3 17.
 (ed.)(2000) *Representation*, The Open University, Sage, London.
- Hall, Stuart & Gieben, Bran(eds.)(1992) *Formations of Mordernity*, Polity Press.
- Healy, Jane(1990) *Endangered Minds-why Our Children Don't think*, Simon and Schuster. Nishimura, Bensaku & Niimi, Aki(trans.)(1992) *Horobiyuku Shikooryoku*. Taishyuukan, Tokyo.
- Jameson, Fredric(1997) *Postmodernism, or, the cultural logic of late capitalism*, Duke, Durham.
- Johnson, N(1971) Beyond Sesame Street, *Nation Elementary Principal*, 50:6 13.
- Kraidy, Ute Sartorius(2002) Sunny Days on Sesame Street? Multiculturalism and Resistance Postmodernism, *Journal of Communication Inquiry* 26, January(2002)9 25.
- Keller, Douglas(1995) *Media Culture*, Routledge, London and New York.
- Kojima, Akira(1996) *Sesame Street Hyakka*, Kyoiku Siryo Syuppankai, Tokyo.
- Lesser, Gerald S(1974) *Children and Television*, Vintage Books, New York.
- Maidment, Richard & Mitchell, Jeremy(eds.)(2000) *Culture*, The Open University.
- Mac Neil, Robert(1983) Is Television Shortening Our Attention Span? *New York University Education Quarterly* 14: 2(Winter)
- Marshall, Gordon(1998) *Dictionary of Sociology*, Oxford.
- Mellencamp, Patricia(ed.) *logics of TELEVISION*, Indian University Press

- Mic's Big Hug-Tubbyland (2002) *Let's go to Tubbyland* [Internet] Available from: <http://members.jcom.home.ne.jp/teletubbies/land.html>
[Accessed 23 September, 2002]
- Nation's Schools (1970) 'Sesame Street' asks: Can television really teach? 85, 58-9, F.
- Palmer, E.L. (1969) "Can television really teach? preschoolers watch Sesame Street series", *American Education* 5: 2-6
- Postman, Neil (1985) *Amusing Ourselves to Death*, Methuen, London.
(1996) *The end of Education*, Vintage Books, New York.
- Rick Lyon, [Internet] Available from: <http://www.lyonpuppets.com/elmosworld.html> [Accessed 18 March, 2004]
- Sesame Street (2004) [Internet] Available from: <http://www.nhk.or.jp/sesame/> [Accessed 29 February, 2004]
- Sesame Street Opens (1969) *Saturday Review*, 52:91, November 15.
- Storey, John (2001) *Cultural Theory and Popular Culture*, Prentice Hall, London.
- Stuhr, J.J. (ed.) (2000) *Pragmatism and Classical American Philosophy*, Oxford University Press, Oxford.
- Teletubbies: Background (2000) [Internet] Available from: <http://pbskids.org/teletubbies/background.html>
[Accessed 23 March, 2004]
- Thayer, H.S. (1981) *Meaning and Action*, Hackett, Indiana.
----- (ed.) (1982) *Pragmatism*, Hackett, Indiana/Cambridge.
- Thompson, Kenneth (ed.) (1997) *Media and cultural Regulation*, Sage.
- Ulrich, Roger E. (1970) "A Behavioral View of Sesame Street", *Educational broadcasting review*, National Association of Broadcasters, pp.17-22.
- Veatch, Janette (1970) "Program Reviews: Sesame Street", *Educational broadcasting review*, National Association of Broadcasters, pp.57-60.
- White, Morton (1973) *Pragmatism and the American Mind*, Oxford University Press, London.
- Woods, Tim (1999) *Beginning Postmodernism*, Manchester University Press, Manchester and New York.
- Wood, Anne (2002) Umino Oya, Anne Wood ga kataru 'Teletubbies' [Internet] Available from: http://www.teletubbies-jp.com/anne_wood/anne_wood.html [Accessed 23 September, 2002]

追記：本論文は，2004年3月 York St John, College of the University of Leeds, International Studies 修士号取得論文：Contemporary Society and Culture, 'Linguistic Imperialism: Culture and Educational Values in *Sesame Street*' の趣旨をまとめたものである。